

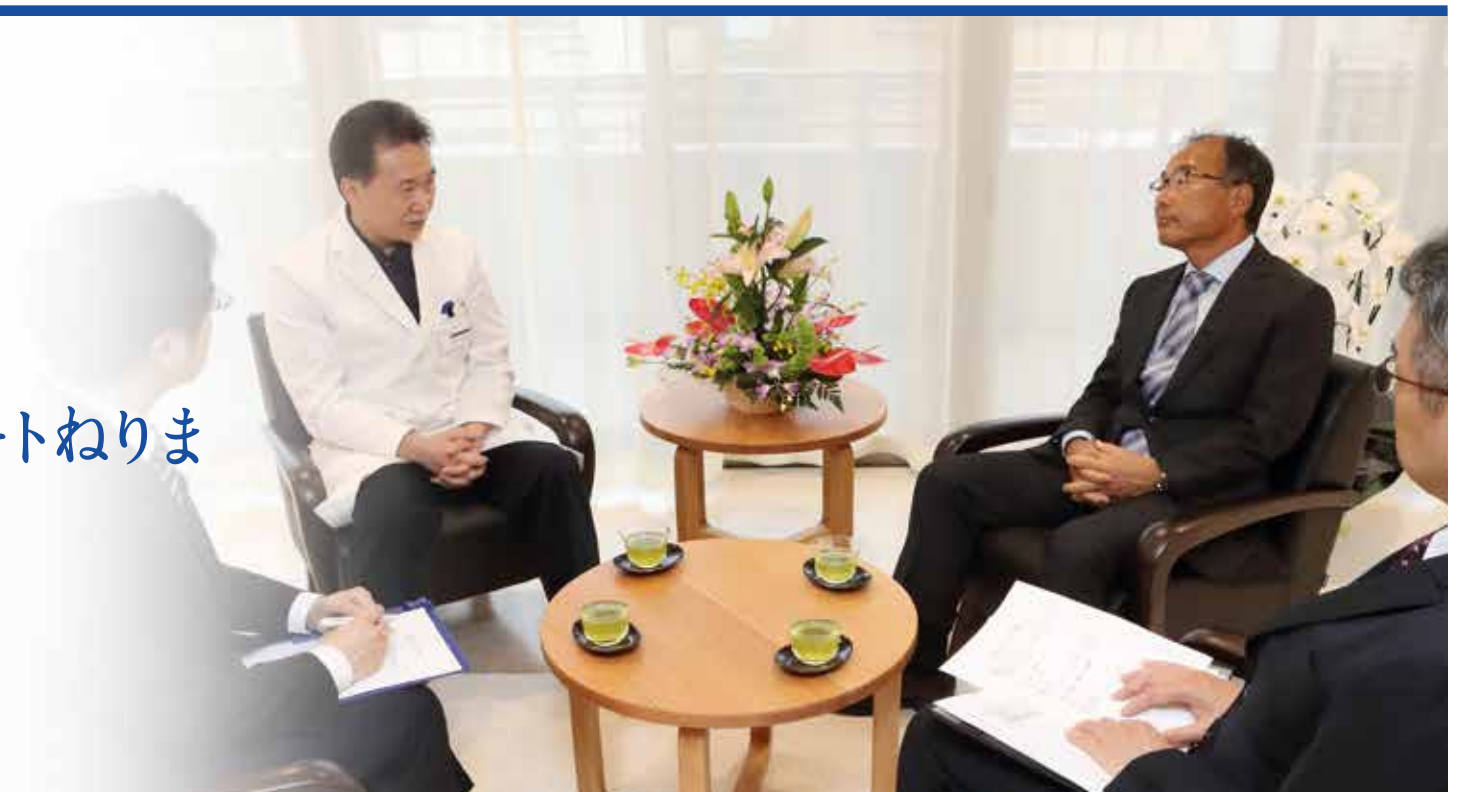
## Vol. 155

2017.5.19

## 理事長トーク Top Interview

ねりま健育会病院／ライフサポートねりま  
開院から1ヶ月を迎えて

医療法人社団 健育会 理事長 竹川節男



「ねりま健育会病院／ライフサポートねりま」は2017年4月1日に開院し、今月で開院から1ヶ月が経ちました。今回の理事長トークではねりま健育会病院 院長 兼ライフサポートねりま管理者 酒向先生（以下、「酒向」）、ねりま健育会病院 矢吹マネージングディレクター（以下、「矢吹」）、ライフサポートねりま 鈴木事務長（以下、「鈴木」）の3名より、開院から1ヶ月を経過した病院／老健の状況について、話を聞きました。

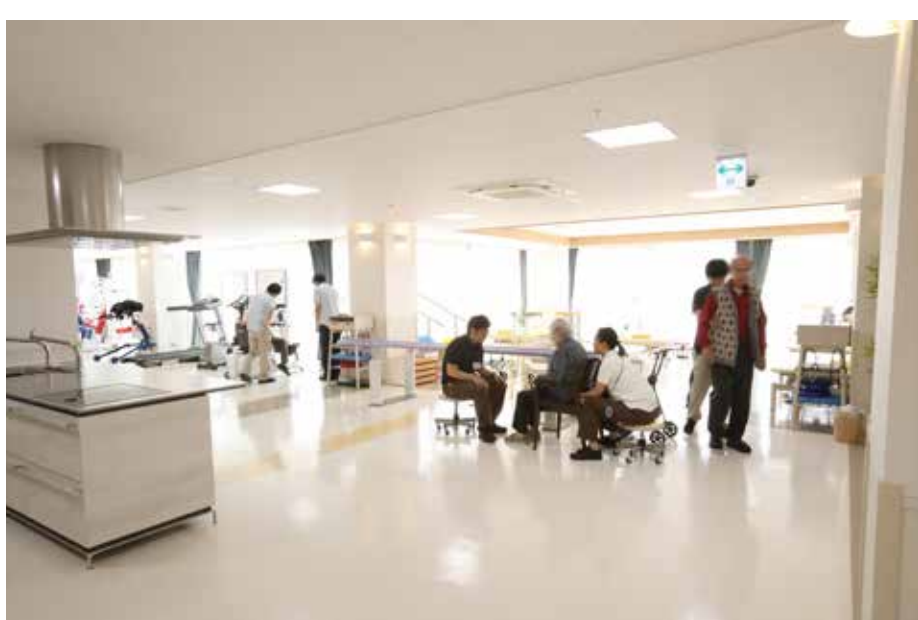
## 1. 開院から1ヶ月の運営状況 ～入院・入所件数など、順調に推移～

理事長 地元からの大きな期待も受けながらの開院でしたが、慣れないことも多く、日々忙しかったことと思います。この1ヶ月の運営状況はどうか。

酒向 地域からの期待の中で重症の患者さんについても続々と受け入れておりますし、運営としては順調に推移していると思います。外来については、病院の方はリハビリ外来を主としております。開院と同時に10名くらいが来院されまして、その後は地域の方が聞きつけて来院するという形で来られています。一般外来については、現状では地元の方や患者さんのご家族が受診されるという形です。



鈴木 老健については、4月・5月は、ほぼ予定通りの人数の方にご入所いただいています。平均して、毎日1件の入所のお問い合わせをいただいております、スムーズに入所していただける体制を整えていくことが、今の課題です。



リハビリテーション室

酒向 老健は入所希望から入所までの期間が短く、駆け込み寺のようにいらっしゃる方が多い印象です。ギリギリの状況になるまで施設への入所の相談ができない方が、地元には結構いらっしゃるようです。そのような方に我々の施設の利用を広報していくことも、大事なことだと感じています。また、回復期リハビリテーション病棟に入院される方の1割程度が老健を経て自宅に帰るというケースになると予想されますので、回復期リハビリテーション病棟が通常稼働するようになると、今後は老健も非常に忙しくなると思います。

## 2. 地域や近隣からの反応 ～皆さんの期待の高さを実感～

理事長 運営については、順調のようで安心しました。広報活動、そして近隣の病院や地域からの反応はどうですか？

矢吹 開院の直前になりますが、2017年3月25日に内覧会を行いました。お天気に恵まれたこともあって、地域のケアマネジャーなど医療・介護の関係者、住民の方など300名以上の方が来院されまして、病院で用意したノベルティも昼のうちになくなってしまうくらいでした。その際にも、入院や入所、そして通所や外来リハなど、お問い合わせも多く聞かれて、期待の高さを実感しました。特に近隣にお住いの皆さんは、随分興味を持って下さっているようでした。



広報活動については、酒向院長が率先して行っており、近隣の総合病院や医師会等順次ご挨拶に伺っています。反応としては、「練馬区に回復期リハビリテーション病院が欲しい」と思っていたんです」というお声を多くいただきました。皆さん、この病院ができたことを喜んで下さっているという印象です。



2017年3月25日 内覧会

鈴木 老健におきましても、近隣のケアマネジャーと病院に向けて老健の機能の説明会を開催しました。当施設会議室にて30名の方を対象に行なったのですが、病院併設の老健施設がこの地域にはないので、医療の整った老健ということで非常に期待が大きいことを感じました。また、職員の中にも、他の老健で勤めた経験がある者が結構いるのですが、こんなにもドクターが老健に来て指示を出される施設は初めてだと口を揃えて言っています。やはり医療の質が高く、医師がしっかり診てくれるという印象を職員自身も持っているようです。



2017年4月14日 介護老人保健施設ライフサポートねりま 説明会

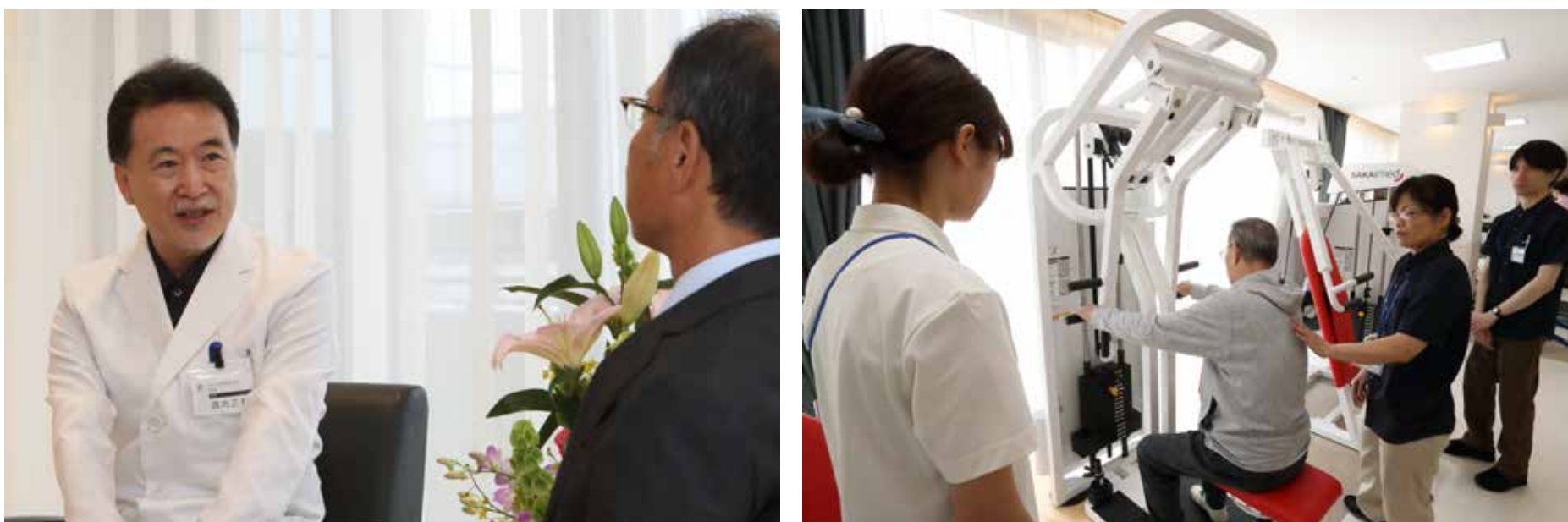
理事長 この地域で初めての病院と老健の複合施設であることで、この特徴を生かして地域に貢献できそうですね。

酒向 患者さんの中には、非常に当院に期待されて来る方と、全く知らずに来られた方の2パターンいらっしゃいますが、全く知らずに来られた方は、当院のリハビリテーション力の高さに驚かれています。期待されてきた方についても、現状では満足いただいております。感謝の声を頂いています。しかし、まだまだスタッフが若く、特にスタッフの約半分が新卒です。これから入院患者さんやご利用者を多く受け入れていくための課題は、彼らをしっかりと教育していくことだと考えています。

### 3. 教育について ～職員満足度を高めていくことが重要～

理事長 そうですか、やはり課題は教育ですね。健育会グループは、職員一人ひとりが能力向上をめざすのは医療人として当然の義務であり、それをサポートするのが経営の役割であると考えています。ねりま健育会病院／ライフサポートねりまは、教育についてどのようなスタンスで取り組んでいますか？

酒向 現時点のスタッフの構成の中で、重症な患者さんにしっかり対応して治療できるスタッフは3割でしょうか。あとは半分が新人で、後の2割は経験者だがブランクがある方などになっています。そのような状況の中、教育に関して私が一番大切だと考えているのは「現場力」です。「現場力」を発揮するために何が必要なのかということは、教科書を読むだけでは学べません。総論と各論がありますので、総論については「ねりまセミナー」というのを週1回月曜の夕方に行って学んでもらい、各論については、日々の実践の中でOJTでドクターや上長が指導するシステムを作っています。もう一つ大切にしているのは、研究発表です。スタッフに大きな学会で発表ができるよう指導サポートしています。また医学教育以外のことで言うと、我々はホスピタリティをととても大事にしていますので、事務部門も含めてホスピタリティの教育も行なっています。



リハビリスタッフのOJT風景

矢吹 酒向院長より、良い医療をしっかりと行っていくためには事務部門のクオリティも高くなければいけないと指導を頂いているところですので、事務方の教育もしっかりと進めています。また、つい先日、リハビリ部門の新社会人24名が、北海道で行われた健育会グループの新社会人研修に参加しました。行く前はフワフワと浮き足立ったメンバーも、帰って来ると随分引き締まった行動に変わりました。周りの職員からも、「あの子変わったね」という声もあって、北海道での研修についても、非常に良かったと感じています。

採用については、世の中的に厳しい状況ですが、当病院についても同じで、まだスタッフが少ない状況です。私たちは酒向院長の元、「こういう人材が欲しい」ということがはっきりしています。私たちの病院のやり方に賛同してくださる方で、どちらかというと若く柔軟さを持った、やる気のあるスタッフを求めています。採用活動を積極的に行なっていくのはもちろんのこと、採用された方の教育をしっかりと行い、長く勤めていただけるようにしていきたいと考えています。



リハビリテーション部門スタッフ

酒向 やはり教育体制が整っていないとスタッフが来ても、すぐに辞めてしまいます。これから教育体制をしっかりと整えて、職員が満足して働ける環境を作り、職員満足度を高めていくことを目標にしています。

## 4. 建物や環境について ～素晴らしい環境を武器に、良い治療ができると確信～

理事長 病院・施設の建物については、リハビリ室前に広がるガーデンなど非常にユニークな建物が作れたと考えています。実際に稼働し始めての使い勝手はどうですか？

酒向 非常に素晴らしい建物を作ってください、大変感謝しております。東京23区の中に、あれだけ素敵なガーデンがあり、敷地内で300mも歩ける病院はなかなかありません。これだけの武器を使わせて頂いているので、良い治療ができると確信しております。



広々としたガーデン

鈴木 老健においても、十分な環境を用意して頂いておりますので、職員も質の高い介護・看護を提供するという事に専念できています。病院からの良い刺激を受けて、質の高い介護を目指していこうという気運になっています。

酒向 病院の敷地内の至るところにガーデニングを行い、365日どこかに花が咲いているというコンセプトで3、4種類の花を植えています。花の位置を示したマップも作成し、マップを見て花を探しに行くという本能に働きかけるようなリハビリも行なっています。また、このガーデンを活用してCSRの取り組みもできればと考えています。例えば、地域のシルバーの方のお茶会を開催したり、地域の保育園の子どもたちに楽しんでもらうと共に、何かの時に発表会をしていただくなど、ガーデンの有効活用ができればと考えています。



ツツジの花が美しいガーデン



敷地内の植物マップ

矢吹 すでに町内会長さんからは、夏休み期間、ラジオ体操のために駐車場を使わせてもらえないかという要望も受けています。敷地や建物を地域の皆様との交流の場としてご活用頂けるよう検討していきたいと考えています。

## 5. より良い治療環境づくり ～ヒーリング・エンバイロメントを継承～

酒向 もともと理事長が病院もアーティスティックにするという考えがおりで、いろいろな病院で良い環境を作られてきています。そのような中で私たちも理事長の流れを汲んで、アーティスティックな雰囲気作りを大切にしています。リハビリが訓練ではなく、楽しい環境で行うことができるということも大切だと考えています。また、職員が使用する廊下では人間回復をテーマにした絵を飾っています。「何が何だかわからない」「ちょっと光がさしたが鬱々としてうまくいかない」「なんとなく解るようになってきた」「新たな人生を歩んでいきたい」という人間回復のそれぞれの段階をテーマに、ギランバレー症候群で四肢麻痺になった経験がある22歳の若い画家が描いたものです。



理事長 健育会グループでは、もともと米国などで使われている「ヒーリング・エンバイロメント」（治療的な環境）というコンセプトを20年以上前から取り入れていて、熱川病院の建て替えの際にも取り入れていますし、またどの病院でもそのようなことに配慮しています。今回のねりま健育会病院/ライフサポートねりまでも、長い廊下のアクセントとなるよう十数カ所に表情の違うオブジェを配するなど工夫していますし、酒向先生にもその考えを引き継いでいただけているとのことで、よりよい治療環境を創り出せているのではないかと思います。



廊下に飾られた人間回復をテーマとした絵



廊下に飾られているオブジェ

## 6. 自治体との連携状況 ～タウンリハビリテーション実現に向けて～

理事長 2017年3月19日の開院式の際には、練馬区地域の自治体からの出席者も多く、期待の高さを感じました。私たち健育会グループと地元自治体である練馬区との間にはもともと信頼関係あり、その信頼関係をベースにして、酒向先生には発展的な取り組みを進めて頂いていると感じていますが、その後はどうですか？



酒向 2016年4月、練馬区では、この病院ができることを前提として練馬健康医療福祉都市構想委員会が設置され、年4回の検討会・勉強会を行いました。開院後に委員会のメンバーも見学に来られ、地元に非常に有益な病院ができたと喜んで頂いています。私たちは、当院で治療してお家に帰っていただき、街の中で元気に生活していただくという「タウンリハビリテーション」という考えを持っています。これから退院する方が続々と出ますので、自治体と我々が連携しながら、「タウンリハビリテーション」が可能になる街づくりやコミュニティの再活性化を進めていきたいと考えています。

矢吹 自治体からの見学者は、非常に多くいらっしゃいました。区の議員や職員の皆さんにも、この病院が非常に注目を受けているということを実感しています。

酒向 今後、退院した患者さんの退院した後の社会参加調査を行なっていこうとしています。我々の病院と練馬区で連携し、退院した患者さんがその後に社会参加できているかどうかをフォローアップするシステムも、民間企業の協力を得て作っています。



## 7. 今後に向けて ～まずは満床フル稼働で地元へ貢献すること～

理事長 最後になりますが、今後への抱負をねりま健育会病院／ライフサポートねりまで働く職員に向けてはもちろんのこと、健育会グループ全職員の良い刺激になると思いますので、聞かせてください。

酒向 一番の地元への貢献は、常に満床・フル稼働していくことだと考えています。そのためには、まず病院の理念・方針に賛同していただけるスタッフに早く来て頂いて、フル稼働にすることが目標です。そしてその臨床をベースにしながら、我々の病院で治療した結果を、健育会グループの研究発表はもちろんのこと、学会等でどんどん発信していきたいと考えています。

老健では、「ゆるくりハビリして、お家に帰っていただく」「口から食べれない方が、なぜ食べれないのかをきちんと解明して、食べれるようになって帰っていただく」「お家で困る認知症の方が、可愛い認知症の方になっていただき帰っていただく」という3本の柱に加え、「どうしてもお家で過ごせないという方は、看取りまでお世話する」という4本目の柱を持っています。これを決められた範囲の中で効率的に実現するのは大変ですが、これらを実現することで老健の価値がさらに高まると思いますので、積極的に取り組み、こちらについても全国へ情報を発信できるように考えています。



理事長 開院から1ヶ月がたち、ほぼ順調に病院も老健も活動されているとのことで、大変安心しました。酒向先生の元、ねりま健育会病院とライフサポートねりまは健育会グループ、そして日本のリハビリテーション医療を引っ張っていく存在となれると思いますので、大いに期待しています。

